三位一体主日礼拝説教「あなたを《神の子》とするもの」予稿
日本基督教団石神井教会　2026年5月31日

【旧約聖書日課】申命記　6章4～9節

4聞け、イスラエルよ。我らの神、主は唯一の主である。5あなたは心を尽くし、魂を尽くし、力を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい。6今日わたしが命じるこれらの言葉を心に留め、7子供たちに繰り返し教え、家に座っているときも道を歩くときも、寝ているときも起きているときも、これを語り聞かせなさい。8更に、これをしるしとして自分の手に結び、覚えとして額に付け、9あなたの家の戸口の柱にも門にも書き記しなさい。

【使徒書日課】ローマの信徒への手紙　8章12～17節

12それで、兄弟たち、わたしたちには一つの義務がありますが、それは、肉に従って生きなければならないという、肉に対する義務ではありません。13肉に従って生きるなら、あなたがたは死にます。しかし、霊によって体の仕業を絶つならば、あなたがたは生きます。14神の霊によって導かれる者は皆、神の子なのです。15あなたがたは、人を奴隷として再び恐れに陥れる霊ではなく、神の子とする霊を受けたのです。この霊によってわたしたちは、「アッバ、父よ」と呼ぶのです。16この霊こそは、わたしたちが神の子供であることを、わたしたちの霊と一緒になって証ししてくださいます。17もし子供であれば、相続人でもあります。神の相続人、しかもキリストと共同の相続人です。キリストと共に苦しむなら、共にその栄光をも受けるからです。

【福音書日課】マルコによる福音書　1章9～11節

9そのころ、イエスはガリラヤのナザレから来て、ヨルダン川でヨハネから洗礼を受けられた。10水の中から上がるとすぐ、天が裂けて“霊”が鳩のように御自分に降って来るのを、御覧になった。11すると、「あなたはわたしの愛する子、わたしの心に適う者」という声が、天から聞こえた。

**神の霊によって【こども説教のために】**

「聖なる聖なる」を歌う日曜日を迎えました。「三位一体主日」です。「聖霊降臨」を記念した「ペンテコステ」に続く日曜日を、教会は、「三位一体主日」としてきました。「父・子・聖霊」とお呼びする神、「三位一体の神」を記念する日曜日です。

讃美歌 351 番「聖なる聖なる」は、ちょうど 200 年前に亡くなった英国教会司祭 R・ヒーバーが「三位一体主日」に歌うための讃美歌として作詞しました。その後、教会音楽家 J・B・ダイクが作曲した曲が付けられてから、長く教会で歌い継がれてきたのです。

日本語のタイトルは「聖なる聖なる」ですが、歌詞は「聖なる」が三度繰り返されます。「聖なる、聖なる、聖なる主よ」と始まります。それは、特別な讃美の響きなのです。

大昔の預言者イザヤは、その讃美の響きを神殿で聴きました。「聖なる、聖なる、聖なる万軍の主。主の栄光は、地をすべて覆う」（イザヤ 6:3）。

弟子たちの教会が生まれた時代、ヨハネという弟子は、捕えられてパトモス島で迎えた日曜日の朝、祈りの中で開かれた天に上って行って、その讃美の響きを聴きました。「聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな、全能者である神、主、かつておられ、今おられ、やがて来られる方」（黙 4:8）。

イザヤもヨハネも、その讃美の響きが天使たちによって歌われているものであることを知ったのです。

わたしたちが「聖なる聖なる」を歌うとき、天使たちが天上で歌っているあの讃美の響きが聴こえてきます。本当ならば天使たちにしか歌えない特別な讃美を、わたしたちは、天使たちが天上で歌ってくれているので、この地上で歌うことができるのでしょう。

いいえ、本当は、わたしたちは、天使たちよりももっと特別な讃美の響きを響かせることができるのです。ペンテコステに「聖霊」をお与えいただいたからです。天の御父がご自身の霊をお送りくださったのです。わたしたちを「**神の子とする霊**」です。「**神の子**」ならば、天使たちよりも優れています。天使たちよりも天の御父に近く立つことが許されているのです。「**神の子**」として御子イエス・キリストと同じところに立つようにと、天の御父は、わたしたちに御自身の霊、聖霊をお与えくださいました。

今、地上の教会に集っているわたしたちには、まだ天使たちの助けが必要です。天に上げられた御子の助けが必要です。天から与えられる聖霊の助けが必要です。それでも、わたしたちはすでに、「聖なる聖なる」と歌うことができます。「天の父」とお呼びして祈ることができます。「三位一体」のお方によって、わたしたちはすでに、「神の子」と呼ばれているのです。

**聖霊によって**

先週は「聖霊降臨祭（ペンテコステ）」のために「赤」色で飾っていた礼拝堂を、今日は「白」色に戻しました。「白」は、「三位一体」の神、「父・子・聖霊」のご栄光を表す色です。「降誕祭」とそれに続く「降誕節」、「復活祭」とそれに続く「復活節」に、礼拝堂は「白」色で飾られます。その同じ「白」色で、「三位一体」を記念する主日を憶えるのです。

実は、先週の祝いの礼拝は、例年になく集まる者が少なかったのです。普段通りの人数は集まりましたが、祝いの礼拝としては多くありませんでした。お休みされた方には、それぞれのご事情がありました。代わりにオンラインで礼拝に加わってくださった方も少なくなかったようです。普段よりも多くの方が、オンライン礼拝にあずかってくださっていました。とは言え、実際に礼拝堂にまでおいでいただけたわけではありません。祝いの礼拝に共に一つところに集められるのは、他に代え難い特別な恵みなのです。

先週は、ペンテコステの祝いを分かち合うためにと、有志の奉仕者が「鳩のクッキー」を用意してくださっていました。「鳩」は、洗礼をお受けになられた主イエスのもとに天から降って来た「霊」が「**鳩のよう**」であったと伝えられていることから、「聖霊」を表すシンボルの一つです。ペンテコステに「鳩のクッキー」をお渡しするようになったのは、10 年前からです。わたしどもが石神井教会に着任した一年目のペンテコステの祝いの日、伝道師が一人で準備した「鳩のクッキー」を、祝いの礼拝においでになられた皆さんに振舞いました。ただし、伝道師一人で準備できた数には限りがあり、全員には行き渡りませんでした。二年目からは、有志の皆さんがこれを引き受けてくださいました。祝いの礼拝においでの方全員に行き渡るようにと、十分な数をご用意くださるようになったのです。コロナ禍には自粛しましたが、その後再開してからは、それまで以上にたくさんの「鳩のクッキー」をご用意くださるようになったのです。来会者だけでなく、ご家族のためにもお持ち帰りいただけるようにとお考えくださっているのです。

はじめのペンテコステの日、集まっていた弟子たち**一同は聖霊に満たされた**（使 2:4）といいます。そして、自分たちに与えられた恵みを語り出し、自分たちの集まりの外にいる人々にまで、それを届け始めました。

聖霊に満たされたとき、わたしたちは、与えられた恵みを自分の中に留めておけなくなるのでしょう。「鳩のクッキー」は、教会の集まりを越えて溢れるようになりました。恵みは用意されていました。ただ、それを受け取り、届ける者が、十分ではありませんでした。けれども、今からでも遅くありません。「鳩のクッキー」は十分に用意されています。聖霊は、十分に注がれています。受け取る者の手の開かれることだけが、待たれているのです。

**「アッバ、父よ」**

ペンテコステ礼拝には、わたしどもの前任地教会の方が二人、おいでくださっていました。わたしどもと同世代で、子どもたちも年齢が近く、共に子育てをした仲間でもあった方々です。10 年前の就任式には親子そろって来てくださっています。今回は、すでに親離れした子どもたちはそれぞれに忙しく、母親たち二人で来てくださったのです。実は、わたしどもが石神井教会に転任する直前、その子どもたちを含む教会の子らと我が家の子らとで、半年ほど洗礼準備会をしました。実際に洗礼を受けたのは、当時小学 3 年生の子一人だけでしたが、その子と共に皆で、洗礼準備の学びをしたのです。

洗礼を受けたその子は、幼児の頃から母親と一緒に主日礼拝に出席していました。教会から少し離れたところに住んでいましたから、朝早い教会学校礼拝には来ずに、主日礼拝から来て母親と一緒に主日礼拝に出るというのが常でした。1 時間半ほどの礼拝中、いつも飽きることなく母親の隣で礼拝をしていました。母親は、その子に幼児洗礼を受けさせることはしませんでしたが、早く洗礼を受けてもらいたいと願っていたようです。主日礼拝の中で執り行われる聖餐や洗礼をその子に説明しては、「洗礼を受けない？」と問いかけていたようです。まだ小学校に上がる前、その子は、母親に聞き返したそうです、「洗礼を受けたらどうなるの？」。母親は、牧師がいつも語るように、その子に言いました、「神さまの子になるんだよ」と。すると、その子は、「だったら受けない。わたしは、ママの子が良い」と応じたそうです。その子が、数年後、再び母親に「洗礼を受けない？」と問われたとき、今度は、素直に「受ける」と応じて、洗礼準備会、そして受洗に至ったのです。

その子の中で、数年の間に何が変わったのか、準備会をしながら、わたしは考えていました。本人の中には、何か理由があったのかもしれません。ただ、わたしは、その子に「**神の子とする霊**」が働き、その子がそれを受けとめられるときがようやく来たのだ、ということしか分かりませんでした。けれども、それで十分だと思いました。

「子」は、親によって「わたしの子」と呼ばれることで、「子」になるのです。親も、「わたしの子」と呼んだ「子」によって「父よ」「母よ」と呼ばれることで、親になるのでしょう。

唯一人の神が、御子イエスを「**あなたはわたしの愛する子**」と呼ばれた日、神は「天の御父」となられました。「天の御父」は、わたしたちのことをも、「わが子」とお呼びくださるために、ご自身の「霊」を仕向けてくださり、わたしたちが「**アッバ、父よ**」とお呼びすることができるようにしてくださったのです。

聖霊を受けた神の子らよ、天を仰いで「天の父よ」とお呼びしましょう。